

本の中で先生「考古学の世界では、出土品などの分類が目的化してしまい、他の学問の成果を取り入れ縄文人の精神性を明らかにするという作業を長い間怠ってきた」「人間とは何かという根源的な処、縄文人の人間としての側面を研究することが必要です」「現代社会に生きる我々、合理的、科学的思考あるいは経済的価値観優先の考えからとは違う考え方、現代人が遥か昔に失ってしまった思考方法がある、現代人が人間とは何かを考えるためのヒントがある」

大島直行著<月と蛇と縄文人>私は先祖である縄文人の精神世界「ころ」について書こうと思う。縄文人は現代に生きる私たちには理解しにくい精神世界に生きていました。それは人類学者が「神話的思考」あるいは「野生の思考」と呼ぶ「ものの考え方」から生み出された不思議な精神世界です。縄文人が現代人とは異なるものの考え方によって土器・土偶づくりを行っている。土器・土偶の形が奇妙奇天烈に見えるのは彼らの造形技術が拙いからではなく、独特の世界観、精神的世界観によって表現されているからだと気がついたのです。世界中の民族がそれぞれに神話をもっている。現代人の科学的思考からするとありえないような話が神話にはたくさん出てくる。なぜモノ（動物・植物・鉱物）が存在し、コト（気象・自然）が起こるのか。

大島先生が説く処の縄文人の精神世界、あらゆる学説を読破され、この模様は、この形は、この生活態度は、この住居は、と縄文人を浮き彫りにされている。我々素人もこれなら意見が言える、たとえ間違っている、ありえない話でもかまわないから、縄文人もヒトだから、ヒトの考えなら、勝手なこと言えるということで考えてみた。住まいの近所に国立民族学博物館がある。先日も博物館に行った、世界各地のお面がある、人形がある、絵がある、衣服がある。今、手元にあるチケットに写された人形が載っている。使い古された黒光りのお面、細い目、歯が並んでいる、髪の毛は鉄道の犬釘を曲げたような黒光りが何本も、あたかもそれはオールバックを思わせる、お面の上に半ズボン姿の紳士か少年かがカンカン帽をかぶって手を上げている。横に日傘、少年の顔は白塗り、クチビルは黒色、それこそ奇妙奇天烈な Figure だけれど、これがまた魅力的だ。Figure を言葉で説明する、イメージの世界を言葉で表す難しさヒシヒシなり。土人の衣装に土人のお面などという言葉はふさわしくないかもしれないが、いまだ土の上で暮らし、土に親しんでいるヒト、その民族、そういう親しみを込めての土人という言葉が許されるとして、彼らのデザインにはハッとすると、「なんだ」「えっ」という驚きと感動がある、それはオレだけのものかもしれないが、大きな木を割りぬいて造られたもの、何かの絵の具で白に黒に、その横に極彩色の大きな鳥の羽が飾られている、その傍に日本の“なまはげ”もある、負けてはいない迫力で飾られている。別のコーナーに行くと、今まで見た事が無いようなイメージのデザイン、Figure もお面も衣装も布もある。ヒトが考え付くイメージの世界の広がり、「こんなものが」と発見の喜び、「これは嫌いだけれど、質もセンスもいい」と思われるものと様々だ。

縄文人の 土器・土偶のイメージやデザイン、時代というものを考えなかったら、民俗博物館に飾られたたくさんの物の中に入れても、普通に面白い特異なイメージやデザインだ、新石器時代というから考古学の分野で話されるだけかもしれない。

大島先生：縄の模様は蛇を表す、蛇は神話の世界では月の世界を分有する。脱皮や冬眠が「不死」や「再生」のシンボルとされ、男根になぞらえられ、女性が身籠るための水（精液）を月から運ぶとなぞらえられる。縄文人は蛇の交尾でオスとメスが絡み合う様を縄で表現した。

人面・土偶装飾付土器には「死の再生」を象徴しているものがある。こうした装飾土器は、いずれも最初から女性の身体にみたてられ、最盛期のタイプは向かい側に男性土偶・男性を象徴するマムシとセットになり、中で煮られた食物が、性的結合の産物である、新しい生命として意識されていた。

先生のこのふたつの説を読み、もう一度土器・土偶の画像をじっくり見、「先生そこまで解釈しますか、そこまで考えますか」と頭を傾げながら、オレはもっと、これらの縄文の土偶・土器をアートとして楽しみたい、解釈なしで感動したい。

図書館の書架、最近では歴史やら民俗学の本を漁っていたが「何か目新しいもの、変わったものが読みたい」と科学の書架の前で面白そうな本を探していた。科学の本といっても専門書は「ちんぷんかんぷん」何もわからない、数学・天文学・物理・化学・生物学と並んでいる、書架の中に素人向けの本がいくつか在り何とか読める、素人向けと書きながら、多少の知識が無いと読めないものから、それこそ何とか読めるものまでであるが、その何とか読めるものを探していると、ピーター・フォーブス著<ヤモリの指>という本が目にとまった。

以前<カマキリの雪予報>というエッセイを読んだ。著者は新潟辺りのアンテナ会社の社長、「サンパチ豪雪」などというような言葉があるように昭和38年に大雪が降った、家々のTVのアンテナが倒れ、埋まり、「TVが見られない、なんとかしてくれ、アンテナを立て直してくれ」という依頼が殺到したが、それこそ天災、大雪災害に注文通り上手く対応できなかったそうだ。昔からその地方では「カマキリの卵が上の方に産み付けられていたら大雪が降る、反対に卵が下の方に産み付けられていたら、積雪量はたいした事が無い」という風に言われていたそうだ。雪国の爺ちゃん婆ちゃんがカマキリの卵の位置を見て「今年は・・・」なんて話していたらしい。カマキリの卵は冬の雪の季節を草や木の枝にくっついたまま過ごすので、雪に埋もれてしまうのはまずいらしい、雪に埋まらない処で冬を越すらしい。アンテナ会社の社長が大雪被害が予想できればとその言い伝えを検証し始めた。広い地域で、たくさんの卵の情報を集め、測定する作業を何年も続けたらしい。「カマキリの雪情報は間違っていない、正しい」という結論を得た。カマキリは秋に、地中からの何らかの波を感知して、卵の位置を決めるらしいという結論だったように思う。なにかで聞いたが、今のスタッドレスタイヤ、雪国走行のための車のタイヤも「白クマ君を参考に開発された」とまことしやかに話されているのを聞いたことがあるが、これは正しいか間違っているのか知らない。雪の季節、もっぱらタイヤチェーンを巻いていたが、その後スパイクタイヤが表れ、何年か前から世の中スタッドレスタイヤに定着しているようだ。

また、我々の仲間の一人が“いかの神経か、センサーか”を研究しているらしいぞ、と話していた友がいた。いかがどういう能力を持っているのか、どこをどうしているのかその時は「へええ」なんて返事で終わってしまった、言った当人も、それこそ「へええ」以上のものは無いかもしれないが、海の中を泳ぎまわる魚でもいかでも、不思議な力、能力を持っているのは当然だろうと思う。

さて、本題、ヤモリの話、例えば「鉛筆を天井に引っ付けられるか」と言われたらさてどうする、絵描きが常に使っている“ネリ消しゴム”というものがある、普通の消しゴムと違って軟らかく、伸ばしたり押ししたりできる。普段絵を描く時に細い線だけを消したいと思うようなときに、そのネリ消しゴムの先を細くしてその細い部分を使って線を消す、というように使うのだが、そいつをまず鉛筆に押し付けて引っ付かせる、次に天井にも押し付ける、これで何とは引っ付かないか、接着してしばらくは落ちて来ないか、全くダメか、試してはいない。

ロンドン動物園の爬虫類館。ガラスの壁にヤモリが頭を下に向け止まっている。15分ほどして今度は反対側のガラスの壁に同じ姿勢を取ってじっと止まる。ヤモリは面が滑らかだろうが粗かろうが、湿っていようと乾いていようと垂直の面も天井裏もスイスイ移動する。ヤモリの秘密が明らかにされたのは1990年代中ごろ、アメリカでだそうだ。ヤモリの足の裏にある微細構造が観察された。肉眼による観察では接着力を得られる手がかりはほとんど得られない。爬虫類の標準的に見られる、ウロコのような横方向の筋が見られるだけなのだ。普通の光学顕微鏡でもそれ以上の事はわからない。ところが電子顕微鏡で調べるとその構造が少しずつわかってきた。片足に50万本ぐらの毛が生えている、しかもそれぞれの毛が100本から1000本ぐらいに枝分かれしている。「先ちょよにブロッコリーのついた髪の毛みたい」そいつが引っ付く原因だそうだ。死んだヤモリでも引っ付くそうだ。ヤモリの足に近いものもなんとか作れたそうだ。「ならこの接着方法、おまえなら、何に使う」高所恐怖症のオレだけれど、イモリ手袋とイモリ足袋を四肢に着けて、高架鉄塔でも登ってみるか、超高層ビルもいい、アルプスの岩稜もいい」足場も無しに壁によじ登り、天井に貼りつき、下を見てもちっとも恐くない。

画像は本のイラストと偶然雪山で見つけたヤモリ君、雪に潜ろうとしていた。

仙台市在住の友人、竹内さんから展覧会案内状の返信が来た、久方ぶりの彼の言葉は嬉しい限り。「何度も地震で死ぬ思いをしながら、なんとか生きてだけはおります。すっかり仕事からは離れ、あの小さなメモ帳にいまも 3分画（食事時、ならんだご馳走）を描くのが趣味のような生活で、去年は一度仙台を出ただけで、引きこもり人生です」竹内さんの一言を読みながら、今読んでいる冊子にお気に入りの文を見つけた。長いので一部省略で載せます。3年前の講演記録なので、時事問題としてはタイムラグがあるが、原発を「犠牲のシステム」として捉える、第二次世界大戦後のドイツのヤスパース「罪の問題」を参照しながら話しを進める、責任問題の話、事故への告訴・告発のこと、人類が持ってしまった「知」科学知識の知、○高史明（在日朝鮮人作家－オレ推薦お気に入りの作家）は親鸞の言葉に結び付け「よしあしの文字をも知らぬ人はみな、まことのこころなりけるを、善悪の字しりがおは、おおそらごとの形なり」ヒトは文字、言葉によって智慧、知識を得るが、そのことがまたヒトを、無明の闇に突き落とす、と続いていく。先生は「原発廃止」という考え、他の方で「原発存続」という考えの方も読んでみたい、知ってみたい。

2012年高橋哲也著<犠牲のシステム>（福島原発で何が起きたか-シンポジウム）

私は原発を一つの「犠牲のシステム」として捉えています。簡単に説明すれば「ある人々の利益が別の人々の生活、生命、健康、日常、財産、人としての尊厳、生きる希望などを犠牲にしてのみ生み出され、維持される。犠牲にする者の利益は、犠牲にされる者の犠牲なしには生み出されず、維持されない」このようなことがシステムとして成立している場合これを「犠牲のシステム」と呼ぶ。

原発は四つの主要な犠牲を含んでのみ成り立つように思われます。第一に過酷事故によってもたらされる犠牲。第二に原発作業員の被曝労働という犠牲。第三にウラン採掘の際の被曝労働や環境汚染による犠牲。第四に放射性廃棄物による被曝の犠牲。無残にも崩壊してしまった安全神話にすがりつくのでない限り、これらの犠牲を考えることなしに原発を動かす事は困難でしょう。原発は技術的に可能な限り速やかに廃止されるべきだと考えます。

▼1 福島原発事故の責任問題について考察してみたい。第一に今回の事故を起こしてしまった責任。第二に事故が起こった後、東京電力や政府など当事者の対応が適切だったか、この2点だと思います。ここでは第二の問題は扱いません。国会の事故調査委員会は「今回の事故は、自然災害ではなく明らかに人災」と認定しました。しかし、東電、原子力安全保安院、原子力安全委員会、政治家の誰ひとり、事故の責任を取って辞任した人はいません。福島県人の何人かが、東電や規制当局の幹部を、業務上過失致死傷罪、公害犯罪処罰法違反、激発物破裂容疑などで告訴した。他方、今回の事故を「人災」と見るにしても、長い時間の中で膨大な数の人々が関与して進められてきた原発政策だから、特定の人々の加害責任を問う事は無理がある、という議論もある。懸念されるのは漠然とした形での「総懺悔論」や「自業自得論」が一般に広くみられる。新聞に掲載された少年の文「僕のお父さんは東電の社員です。原発は日本人も世界の人々もより快適な生活を求めて利用してきた。事故が起きたからと言って東電だけを責めるのはおかしい」この議論は「みんなの責任だから、だれも責任を取らなくていい」という総懺悔論に帰着する恐れがある。また被災地や、原発立地自治体の住民に対し、一種の「自業自得論」が向けられることもあります。

私はここで、カール・ヤスパース「罪の問題」を参照にするのが有効と思う。ヤスパースによれば、ナチス統治下でドイツが犯した罪は、根源的に一つですが、四つの罪が含まれると考える。「刑法上の罪」「政治上の罪」「道徳上の罪」「形而上の罪」の四つです。この四つ罪の区別を参考に、福島原発事故についても、責任の種類を区別したい。

「刑法上の罪」ナチスドイツの行った犯罪行為は裁判所で刑法に従って裁かれなければならない。

「政治上の罪」国家が政策として行った事は、その政策を決定実行した為政者の責任であると同時に、その為政者を支持した国民全体の責任でもある。

「道徳上の罪」刑法上の罪にならない場合でも「道徳上あるいは倫理上」なすべきではなかったと判断される場合がある。各人が自分の良心に照らし、また「精神的交流のある仲間との間」で問われるべきものである。

「形而上の罪」これは一番わかりにくいのですが、個人の行為であって刑法上の罪にならないという意味では道徳上の罪と同じですが、その罪責性が人間の判断を超えているように感じられるもの、言いかえれば人間どうしの間ではそれを批判したり糾弾したりすることが躊躇される「罪」ということではないかと思います。

「政治的な責任」この責任を負うのは当然政治家であり、原発推進という国策に関与してきた度合いに応じ、多かれ少なかれ政治的責任を負っている。政治的な責任は為政者だけが負うのではなく、そうした為政者を選び、その政策を支えた国民、政治的な有権者もまた負うべきです。原発推進政策を支持した人はもちろん、消極的ではあっても容認した人、無関心に放置した人、程度の差こそあれ政治責任を負っている。3.11以前に原発に反対していた政治家、しかし政治は結果責任であるから反対した政治家も結果として敗北し許してしまったかぎり、政治的責任は免れない。地方政治についてもほぼ妥当するでしょう。熱心に誘致を行った当時の県知事、立地自治体の首長や議員たち、政府や電力会社の語る「安全」を信じるしかなかった面はあります。抵抗しがたい都市化、産業化の時代の中で、発展から取り残される恐れを抱かざるを得なかったが、しかしそれでもやはり、四つの犠牲を含む原発を誘致し、とりわけ過酷事故のリスクに住民を晒すことになった責任は小さいとは言えません。そして地方政治のレベルでも、有権者の政治責任が存在することは明らかです。原発立地の誘致があっても、住民投票や反対運動によってそれを阻んだ自治体、阻んできた自治体がいくつもあることから、逆に明らかになる。

行政官の責任はどうなるでしょう。国の行政官、原発推進の国策を担った政府・経産省、資源エネルギー庁、原子力安全・保安院の官僚たちの責任でしょう。行政官の役割は、政治家が最終責任を負う政治的決定を受けて、そこで決まった政策を実現に導くところに在ります。

司法の責任はどうでしょう。安全性を問題にして起されてきた過去の原発訴訟で、原告勝訴は35件中2件、その2件も上級審で覆されています。司法は電力会社や政府の安全性の主張を追認し、安全神話を強化してきた裁判官たちの責任は決して軽くない。政治家も官僚も裁判官も国家権力を行使して原発推進に関与してきた点では、同罪であり、国家権力の責任を分担するものだといえるでしょう。

「倫理的責任」現代日本のほとんどの人たちは3:11まで、原発で作られる電力を享受しながら、その原発がどのような「犠牲のシステム」であるのか、その問題点を真面目に考えることをしてこなかったのではないのでしょうか。チェルノブイリの事故、JCOの臨界事故は知っていました、原発は危険だとも思っていました。

それなのにどこかで原発のリスクを甘く見ていた。このことが「倫理的責任」に属する何事かであるように私は思います。原発の電力大消費地の人たちも、原発立地自治体の人たちも原発のリスクを甘く見、より便利な生活、楽な生活、豊かな生活等々のための原発電力を享受してきたという処に、多くの人たち共通の「倫理的責任」があると考えます。小学生の手紙「僕のお父さんは東電の社員です。原発は豊かで快適な電化生活を求めた日本中の人々、世界中の人々が造った物だから、責任があるとしたら、みんなに責任がある」という趣旨の意見は決して間違いではないと思う。

学者の責任：原発推進に関与してきた学者たちは、今日の事態に重大な責任を負っていると考えます。政府の役職や、公的立場に就いた学者は刑事責任を問われることもあるし、法的に免責されても「広義の政治的責任」を問われる、そうはならない場合でも、原発推進の立場で研究してきた学者たちは、その関与の度合いに応じて「倫理的責任」があると考えます。

マスメディアの責任：マスメディアは、電力会社から多額の広告収入を得て、「安全神話」の支配に大きな役割を果たしてきました。今日の事態に責任があることは否定できません。マスメディアが広告収入を得て原発の宣伝をしたからと言って、それ自体を法的な罪とすることはできない。マスメディアの責任は、社会的責任という意味で、「倫理的責任」として、社会的、公的な議論を通じて厳しく追及されるべきだと思います。

「原発事故はみんなの責任なのだから東電だけを責めるのはおかしい」という意見、それが「総懺悔論」「自業自得論」になってしまって、肝心の加害責任者たちを免責してしまうことがある。一般の人たち負っている「政治的責任」や「倫理的責任」は、いわば原発の「安全神話」に騙された結果であって、騙した側の加害責任とはっきり区別されなければなりません。「騙した」とは穏やかではないが「絶対安全」と言いながら「安全対策」を怠って被害を生じさせたといういじょう、自らが「安全神話」の虜になっていたとしても、自分を騙すことによって他人を騙したと言わざるをえません。私は原発事故については、賠償を民事上の法的責任と考え、政治的責任と区別します。福島原発訴訟団の動きが注目されます。日本の法体系は原発事故を想定していなかったので、全国的な控訴・告発が起訴されるか、有罪にできるのか、と言えば難しい。「原発を問う民衆法廷」で被災者が「第二次世界大戦で<平和と人道に対する罪>という考え方が生まれたように<人間と自然の尊厳を破壊する罪>という新たな概念を作っても、この前代未聞の罪を裁いていただきたい」と訴えた。私はこの刑事告訴・告発の運動は「戦争責任」にも匹敵する歴史的意味を持っているのではないかと考えます。

#### <形而上の罪>

原爆実験に成功した時オッペンハイマーが「物理学者たちは罪を知ってしまった、それはもう失う事が出来ない知識である」

○朝永振一郎氏は「科学には非常に罰せられる要素があるが、全くやめてしまうわけにはいかない。人間は火を使わないと他の動物と競争できないと同様、科学なしでは生き続けられない、という矛盾がある」

○旧約聖書の天地創造の処に「アダムとイブが知恵の木の実を食べた事で、パラダイスを追われた。ここにも人が知恵を持つことは罪という考えがある。

○高史明（在日朝鮮人作家-オレ推薦素晴らしい作家）は親鸞の言葉に結び付け「よしあしの文字をも知らぬ人はみな、まことのこころなりけるを、善悪の字しりがおは、おおそらごとの形なり」ヒトは文字、言葉によって智慧、知識を得るが、そのことがまたヒトを、無明の闇に突き落とす。

核分裂反応を発見し、その巨大なエネルギーを引き出すことに成功し、核実験に成功する。これはヒトの知の輝かしい栄光に見えるが、同時に人類を全滅させるような悪魔のプロセスでもある。原発は「夢と希望のエネルギー」といわれ、科学技術の偉大な成功と言われたが、出口のない「犠牲のシステム」で、人類を何万年も滅亡の恐怖に突き落とすものだ。より快適で豊かな生活を得るために、54基の原発、高速増殖炉、再処理施設を作ったが、それによって、自分たちの命の営みを不可能にするような危険なものを抱えこんでしまった。ヒトの「知」の内なる矛盾、逆説、形而上の罪は、結果として私たちを、全く想像もしなかった未曾有の「倫理的責任」の前に立たせることになった。日本が仮に全ての原子炉と関連施設の廃止を決めたとしても、すでに抱えてしまった放射性物質や廃炉で生じる放射性物質をどのように処分するのか。私たちの世代は、自らの欲望追求の果てに、あまりにも重い負の遺産を、将来の何世代もの人々に背負わせることになってしまった。福島原発事故は、知識を誇る私たちの、このような罪を表したような気がする。

今、安威川河川敷の遊歩道を走っている、ICレコーダー片手に実況中継をしている。右岸土手の内側を河口に向かって、河口とは大阪湾のこと。遊歩道に舗装がしてある、コンクリートブロックの土手が二段にあり、左側がぐいと落ち込んで水面、右側がぐいとせり上がって土手の上、上下のコンクリート、歩道の間に草が生えている、まだ寒い季節、秋の草刈り以降まだほとんど伸びていない、ぼちぼち春を感じて伸びようかと思案中という処なのかな。対岸を人が歩いている、それに驚いたのか、カモが二羽ふわりと浮きあがり羽をばたつかせて逃げて行った。カモは飛び方がヘタだなあと思ったがそれは間違い、ツバメのようにスイスイ急発進急転回というようにはいかないが、一度天空に舞い上がれば一日中でも飛んでいく、シベリヤまでの何千キロを飛んでいく「ちょっとシベリヤまで」「ちょっと日本まで」冬と夏に向かって飛んでいく。先日読んだものに、鳥類の肺機能、身体機能は疲れを知らないような構造になっているとか、昔の恐竜がそういう機能だったとかで、鳥類はその機能を受け継いでいる。我々人間、哺乳類に比べ何倍も疲れを知らない身体能力があるらしい。この能力を人間に移植してアスリートを造ればさぞかし活躍できるだろう。風がきつい、きついといっても普段より少しだけ風が吹いている程度かも知れないが、川の水が波立っている、小さい三角波がリズムよく騒いでいる、陽の当る方を見ると波の先がキラキラ光る。冬の川、土の上に生い茂っていたススキが、ひよろりひよろりと軸だけを伸ばしている、軸の先にススキの穂といっても綿毛になってしまい、白い綿がちぎれたように微かに穂先に貼りついている、それらが風にそよいでいる。風に吹かれてフラフラ揺れるススキの穂先の方向がみんな違う、同じ方向にそよぐのではなくあっちにこっちに好き勝手な方向にそよいでいる、風というものは、北風、南風というけれど、同じ方向に同じリズムで吹くのではなく、狭い河川敷の中でも乱気流が踊りまわり、穂先がそれにつられて、右往左往しているのだということを発見した、とは子どものようだな。

「文化ってなんだろうね」といわれ、「・・・」とっさに答えられなかった、考えてみた。アメリカ在住の河合さんが今陶器造りにのめり込んでおられる、陶器といってもアメリカ風コンテンポラリーな物ではなく、日本でロクロを習って日本風な花器や茶碗をアメリカで造っている。「へええ・・・」と驚くぐらいに上手い、写真で見るだけなんだけれども、建築家の感性、オレの手に馴染めそうな茶碗が写っている。「日本で川喜多半泥子という陶芸家が流行っています、展覧会をやっています、家族が見に行くと書いています」と書いたメールの返事に「北大路魯山人は破天荒な人だったようです、一方川喜多半泥子は正反対だったのじゃないでしょうか。魯山人の生涯を書いた白崎秀雄の本を読んでびっくりしました」と書いてあった。オレは自分で言いながら、半泥子という人は知らなかった、魯山人も名前を知っているだけ、河合さんはよく調べているなと驚いた。「ピカソの晩年の作品を僕は嫌い、岡本太郎、丹下健三、みな年取ってからの作品は嫌い。年を取ってなおかつ素晴らしい作品を作れる人は尊敬に値します」これはオレの展覧会用はがきを見て「頑張っているね、いいね」といってエールを送っていただいたことと、並みいる大家の晩年作を嫌いだとこき下ろしている話が二つはいつている。こういう言葉がズバリ出てくる、語れるという人が周りに少なくなってきた、語れるということが、人の持っている文化力なんだ。

「文化ってなんだろうね」という話に戻り、文化という言葉が飛び交うけれど「文化とはなんだ、説明して」と言われてはたと困ってしまったそして考えた。オレは画家だから、モノを造るということから話を始めます。人は生きる、その時空の中で見る、聴く、読む、感じる、触れる、そういう感触を身体の中に取り入れ自分の中で咀嚼し昇華し想う。ヒトはその想い、その想うことを形に創りあげる、その形は絵であり、音楽であり、芝居であり、文学であり、踊りであり、とぞくぞくと続く。その創りあがったものを発表する、人々は発表されたものを聴く、見る、読む、感じる。それらの発表されたモノを、作品を、身体に受け入れた人々は、自分の中で咀嚼し昇華し、それを語る、別の人も語る、そういう語りあいが文化。口にだして語るだけではなく、頭のなかで語り、心のなかで語る。言葉というものは、ヒトが何万年か前に手に入れた、食物を手に入れるために「あそこに行けば、旨いものにありつける」「旨いものにたどりつくためには、こんな方法があるぞ」といった話から始まったやり取りが、何千年前から人の生き方、戒め方、計算方法と進み、我々は言葉という財産を得た。絵も音楽もそのほかの諸々のモノたちも、言葉の変形、造り手だけの言葉だと思ふ。文化とは言葉そのもの、言葉で語るもの、言葉で読み取るものという風に考えている。

展覧会が始まった。車に絵を積んで画廊まで運びその日のうちに飾り付けが終わった。会場の展示風景を撮り、その写真を見ながら解説文やら値札やらを作った。初日の朝少し早く入って絵の横に解説文やら値札やらが書かれた紙を貼り付けた。幸子さんが花の飾りつけを始めた。この花が皆さんに好評、山の麓、森の中、里山の空気を感じさせる。白、ピンク、黄、紫の花に緑の葉と枝、自然の草叢の中にあるようで絵が映える、気持ちがやわらぐ、空気が澄んでくる。

搬入の日にこれを書きながら十日も経ってしまった、毎日電車に乗って画廊に通った、始まる1時間前ぐらいには入った。照明を点ける、看板を出す、菓子皿に残った旨そうなやつを1.2個口に運ぶ、コーヒーを沸かす器械に水とコーヒーの粉を入れスイッチをいれる。今年のこの1週間、前半の水曜日までは“寒の戻り”というやつで、思いがけない寒さ、3月下旬に真冬用のオーバーコートやダウンコートはいかがなものかと思いつつ、薄いコートで震えながら通った、この寒さの所為なのかどうかはわからないが、訪ねてくれる人が極端に少ない、どうなっているのだろうと思いつつ前半の三日が過ぎて暖かくなってきた、皆さんが来てくれたと喜びつつ、恒例の金曜日千円パーティには30人強の仲間たちがやって来てくれた。

○ミカさん：朝一番で来てくれた、今年は9月に茨木の文学館でも展覧会をする、お世話になる。○蕎麦屋の三宅さん：「あと1年で福島の店を閉じ小規模な店に移るか、山に籠るか、とにかく周りの60歳前後の知人たちがバタバタ亡くなって行く、その知人たちは総じて酒好き、お仲間にならないように・・・」○岩橋先生：毎年覗いてくださる、いくつ年上なのか定かではないが、10歳ぐらい歳上の80歳前、まだまだ元気そうで颯爽と、明晰に国語の講演などもしておられるとか・・・○直子・真理子のお二人：直子さんは油絵の抽象画を描いている、外国で勉強したい、絵も売りたいと思いはいっぱい。真理子さんは会うのが2回目、大阪外大を出、海外生活も長い、しかも絵を描いている、アトリエで飲みたいと言っている、そのうちやりましょう。○奥間さん：花を持ってきてくれ、幸子さんと花の調整、お二人がいきピッタリで花が冴えてくる。その後画廊関係の方々に来てくれた。向井先生・池田・小嶺・田中・服部各様○寿栄の教室の羽野・田中・西山・西田夫妻、ここは毎月2回と皆さんとの交流が多い分、仲がいい。○大池からは古山・青田・大西・富田・山本・大橋・塩塚各様、毎年のように団体で来てくれる、わからないと言いながら、オレの絵を長い間見てくれる、説明を聞いて納得して、面白い意見も言われる。○蘇山先生：阿蘇山付近出身の書家、で画家。「ええなあ」といつもエールをいただく。○斎・大塚新・今井・大塚・藤原・小西・浅野・高須・藤井・熊本・澤山・栄原・奥田・金田各様。皆さん同級生、この歳になって益々仲良く、子どものようにはしゃいでいる。○社労士の下村・村上・松井・木村各様オーナーの御主人の会社。○元鹿島の福地・川端・松原・岡島・森田・山田・川田夫妻・土各様、設計の方々、この方々の話を仙台の竹内さんとアメリカの河合さんにしなければ。○中尾さん夫妻。三谷さんが亡くなって、相当年月が経った、子どもたちが小さかった頃には家にも遊びに行った、今から思えば骨太の女性だった。○ユリ・ヒサ・福居各様。いつもの、よし子さんが定年退職でてんやわんやだとか、次回是非どこかで会おう。誠二さんが10号の絵が欲しいと持って帰ってくれた。○見世さん：40代の彼女、介護の仕事から一念発起、看護師の学校に合格、これから学生になるそうだ。○衣川・ママ様「20号の絵、ママの店に飾りたい、売れ残ったら、連絡して」○藤原さん：今事務所ビルを新築中、50号の絵を持っていった「やはりこれがいい」去年、何度もアトリエ訪問、壁を見て帰った。○茨木の岡村満・武村・三木・塩見・杉本・川上・片山・後藤・井上・今井各様○山仲間：増谷・相澤・垣内・前川・高橋各様○アトリエの松本・中島・八木・上西・上田・神山・藤井・三瀬・上西・中西各様○昔からの小林・白井・いく・布施・あっこ・樋口・中西各様。いくちゃんが布施を連れてきた「画廊がわからない、どういったらいい」角へ迎えに行くと、小さい男が信号の向こうに「だれだろう・・・」懐かしい、ふせとあっこちゃん、今は夫婦で「俺は彼女の男衆だと大笑い、10号を持って帰る」と嬉しい話、飲まないのに、パーティも楽しんで帰った。○大原さん：「え、奥さんが亡くなった、昨日が葬式・・・」びっくりする話、奥さんが颯爽とシャンソン歌っていた姿が思いだせる。